



遣らずの  
雨

川崎ゆきお

「世の中には天啓や啓示のようなものがあるようだ」

紅葉シーズンで賑わう土産物屋の二階で湯豆腐を食べている客の会話だ。二人は同じ会社の同僚。

仕事で湯豆腐を食べに来ているのではない。遊びに来たのだ。

「天啓ですか」若い方が、その話に乗ってくる。言いだしたのは先輩なので、無視するわけにはいかない。

「啓示、天啓、お告げ、何でもいい。そういうものがある」

「そうなんですか。神のお告げですか」

「まあ、それをしっかりと聞いておけばいいんだが、無視することが多い。あのとき、素直に従っておけばよかったこと、多々ある」

「多々ですか。凄く多いですねえ」

「しかし、この湯豆腐は高い」

「湯豆腐が何か天啓を」

「いや、それは関係ない。さっきから値段を見ていたのだが、これは高すぎる」

「ああ」

「いや、湯豆腐の話じゃない。天啓の話だ」

「はい」

「遣らずの雨がある」

「何ですか？ それ」

「出先で雨が降ってきたので、帰りにくくなったのさ」

「傘があるでしょ」

「持ってこなかった」

「でも、傘ぐらいコンビニへ行けば売ってるでしょ。それに雨の中、長く歩く必要は、それほどないと思います」

「昔々の話だ。今の話じゃない。これは、雨が引き留めているんだなあ」

「それが天啓なのですか」

「偶然そのとき、雨が降り出す。まあ、もう少し小降りになるまで、いなさいと、相手が言う。そこで長居をするわけじゃないから、出ようとする」

「それは例ですね。先輩が実際に体験したことじゃないでしょ」

「誰かの家を訪問し、そんなことになったこともあったかもしれないけど、滅多にないねえ。この遣らずの雨は天が帰さないようにしているとみるかどうかだ」

「先輩、湯豆腐冷めますよ」

「いや、この湯豆腐は檜の湯船に入っておるので、すぐには冷えない。それに私は猫舌でね。熱いと駄目なんだよ」

「そうですか」

「我が家の近くに家電店があってねえ。自転車ですぐに行ける。ずっと狙っていたデジカメがあった。一眼レフだよ。これは持っていない。フィルム時代の一眼レフはあるんだが、今は使って

いない。やはりデジタルでないかね。それを買う決心が大変だった。高いからねえ。それに家族に見つかる。大きいからねえ、ポケットに隠せない。それに買った限り、リビングでじっくり触ってみたい。家内には何となく買うような伏線を何発もかましている。だから許してくれるはずだ」

後輩は下を見て、湯船の湯豆腐を箸で挟んでいる。

「やはり普通の割り箸がいいですねえ。こんな上等な塗り箸は駄目ですよ」

「そうじゃない。スプーンが付いておるだろ」

「あ、なるほど、これを使うんですか」

「二ヶ月」

「あ、はい」

「二ヶ月の間に、五度決心し、買いに行こうとしたが、その手前で辞めた。家内への伏線が足りない。フラグが立っておらん。だから、その流れに乗せるには、もう少し仕込まないといけない」

「あのう」

「何だ」

「遣らずの雨はどうなりました」

「すぐに出る。この後だ」

「はい」

「いつも未遂で終わるので、今度は大決心をした。高い一眼レフを買った後での周辺での影響も、もう無視することにした。大決心だ。それをやり、開店間際に突っ込むことにした」

「うちのポン酢の方が美味しいですよ」

「聞いておるのかね」

「聞いています」

「では、続ける」

「はい、ゆっくりどうぞ」

「今度こそ買って帰るとね。そして、家を出た瞬間、俄雨だ。しかもかなり強い」

「それが啓示ですね。天啓ですね。やらずの雨ですね。買いにやらさない雨ですね」

「来たな、と私は考えたが、無視して傘を取りに戻り、そして再出発した」

「強引ですねえ」

「買わずにはおれん。そのエネルギーを発散させないと、病気になる」

「そうですねえ。ストレスですよ」

「再出発は我が家の軒下から。そして雨。留め雨だな。遣らずの雨のようなもの。しかし私は無視し、家電店までずぶ濡れになりながら辿り着いた」

「傘を差していたのでしょ」

「それほど強い雨だった。パンツまで濡れたよ。天啓の凄まじい警告だよ」

「それでも買ったのですね」

「ああ、買ったとも」

「よかったですねえ」

「よかったのはそこまでだな」

「はあ」

「家に帰ってから大変な騒ぎになった。あれほど張っていた伏線。つまり、私は近いうちに一眼レフを買うであろうということを、何度も何度も何度もかましていた。その伏線がことごとく効いていなかったらしい」

「奥さんともめたのですね」

「家庭の事情はこれ以上話さんが、やはり……」

「やはり？」

「あの雨が天啓だった。啓示だった。お告げだった」

「そうですねえ、天が止めたのですからねえ」

その先輩は、鞆から一眼レフを取り出した。

「これがそのカメラだ。紅葉を一眼レフで撮りたい。それで買った。今日はハレの日なんだ」

「よかったですねえ。目的を果たしたんですから」

「しかし……」

「何かまだ不満でも」

「いつものコンパクトカメラのほうがよく写る」

「そんなことないでしょ」

「いや、思ったほどの凄い写りじゃない。ズームが伸びないので超望遠が出来ない。やはり天啓は正しかったんだ」

「先輩」

「ん」

「湯豆腐冷めますよ」

「うむ」

了